

（承前）

一章 1-17 節

使徒的職務と福音

全体のための導入——それをわれわれはこれらの〔1 - 17〕節で眼前にしているわけだが——は、明瞭に、以下のように構成されている。

1 - 7 節は、ローマの読者への使徒〔パウロ〕の挨拶。8 - 15 節は、すぐに自らローマへ行きたい、との彼の願いに関する説明。16 - 17 節¹は、神的（裁きの判決）——この〈神的裁きの判決〉は、これを信仰において受け入れる者にとっては救い・生命^{いのち}となる——の開始（Eröffnung）としての福音、という福音に関する綱領宣言的規定。

1 - 7 節は、当時の通常の形式における著者の挨拶を含んでいる。つまり、彼は、自らの名を名乗り、名宛人の名を呼び、直接語りかけつつ、自分がかれらに願いうる最善を願う。だが、こうした通常の形式において、パウロは、己れを動かしている事柄について、すでに非常に内容に富んだ仕方で語ったのである。その事柄とは、一人格のことだ（1 節）。それは彼自身の人格ではなく、そしてまた、例えば、この手紙の個々の読み手もしくは聴き手の人格でもない。そうではなく、彼の人格をもローマ教会において結び合わされている諸人格をも超えている、イエス・キリストの人格、のことだ。パウロは、この方の僕^{しもべ}——文字通りにはこの方の奴隷——である。ということつまり、この方にパウロは属しているのであり、ただこの方に属している者としてのみ——己れ自身の人格においてでもなければ己れ自身の権利に基づいてでもなく——、パウロは語ろうと欲するのだ。この主によって召し出され、それまでの境遇から、だがまた、それまでの己れの内的外的な〈生の状態〉から呼び出され、その限り——使徒たるべく——選り分かれたことによって、パウロは〈この主に属する者〉となったのである。彼は、この主から、使徒職という恵み（5 節）を受け取った。すなわち、この主によって全権を与えられた一人の〈派遣された者〉の職務という恵み、を。そして、この〔使徒職・派遣された者〕の職務の委託とは、福音——善き使信——の宣教、である。こうしてパウロは、世における一切から分離され、全面的に福音に拘束され、福音のために選り分かたれている。そして、それが起こるのは、イエス・キリストによって、すなわち、3 節以下〔- 4 節〕でパウロが直ちに《この方は福音の内容そのものでもあり給う》と言うだろうまさにその同じ方によってである。しかし、まずはパウロにとって重要なのは次の確認（2 節）である。《この善き使信は、すでに、聖なる書物（意味されているのはイスラエルの聖なる書物、それゆえ旧約という聖なる書物）における預言者たちによって言い表わされているところのものと同じである》、と。預言者たちがこの福音を前もって言い表わしたのだ。預言者たちはこの福音を、これが登場して、使徒〔パウロ〕の口を通し全世界を進みゆくようになる以前に、告知したのだ。それゆえ、福音と厳密に一致しているところの〈福音の予告〉として、これら聖なる書物は読まれるべきである。だが、福音は（3 - 4 節）、唯一の内容を持っている。一見別のものに見える一切は、ただ、繰り返し繰り返し、この唯一の内容で

¹ 原文は 16 - 18 節だが、明らかに誤植。

しかない。それは、肉によれば——すなわち人間としては——ダビデの家系出身であり、ダビデに約束された息子にして王位継承者である、神の御子のことだ。だが、聖なる霊によれば、死人の中からのその復活を通して——すなわち神の御子としてのご自身の力を通して——、この方は神の御子として任命されて、すなわち証明され啓示されて、——文字通り、他の人間たちから境界づけられ区別されて——いる。この方が、イエス・キリストが、パウロの主である。そして、まさにこの方から、パウロは（5節）、この方による委託の恵みを受け取ったのである。その委託とは、《すべての異邦人の民に向かって、イスラエルの王に対する服従を呼びかけよ》というものである。なぜなら、このイスラエルの王ご自身が、すべての人間の上におかれし支配し給う神の御子なのだから。また、その際の「服従」とは信仰にその本質がある。そしてそれは、かれらの服従によって、このイスラエルの王の名（神の御子にしてダビデの子の名としてのイエス・キリストという名）が、それ自身にふさわしい誉れを得るためである。これら異邦人の民に、もともとは、——だが、かれらも、パウロ自身が「イエス・キリストにおいて召し出されて」いるように、自分たちの場所にあつて同じく召し出されている者たちなのだが（6節）——、パウロの読者たちもまた所属している。すなわち、「ローマにいる、神の愛されし者たち・召し出されし者たち・聖なる者たちのすべての者」（7節）、もまた。これらの呼びかけのどれもが、——パウロが自分自身について語っていたところのことと全く同じく——こう呼びかけられている者たちの何らかの宗教的・道徳的な質を意味しているのではなく、かれらのために、またかれらに対して起こったところのイエス・キリストの業を意味しているのだ。すなわち、イエス・キリストを通してかれらは「神の愛されし者たち」なのであり、イエス・キリストを通してかれらは「召し出され」ているのであり、イエス・キリストを通してかれらは「聖なる者たち」なのであつて、それは、パウロがイエス・キリストを通して使徒であるまさにそのように・まさにその意味において、である。こうして、イエス・キリストは、この方の人格は、真に一致であり給う。すなわち、ここでは、使徒〔パウロ〕と教会とが最初から、また、たとえ互いに顔見知りではなくとも、全くもつて相共にいるところの一致、であり給う。この一致の中で、使徒は、祝福の願いと共に教会に挨拶を送るのである。当時のギリシャ人やローマ人が「喜び」や「幸せ」を願ったのに対して、使徒は「恵み」と「平和」を願う。これらの言葉は、なおもしばしばわれわれに会うであろう。われわれは、ここでは次の確認で満足することにしよう。これらの言葉は、教会を教会たらしめキリスト者をキリスト者たらしめるところのもの——人間に対する神的贈与と、この贈与に基づく人間の生の秩序——を、言わば、〈上から〉および〈下から〉表示している、と。イエス・キリストにおいてこの両者は出来事であるが、しかし、これはまた常に新たに待望されるべきであり、それゆえ、両者がそこから湧き出るところの方に願い求めるべきである。すなわち、われらの父なる神に——この方をわれわれはわれらの主イエス・キリストを通してまさに父なる神として認識する——、そしてまた、われらの主イエス・キリストに——この方ご自身がわれらの父なる神への道そのものでいます——。これらの定型表現〔＝「われらの父なる神」、「われらの主イエス・キリスト」〕の両方を分離することが少なければ少ないほど、つまり、《一方のものは他方のものによって解明されるべきである》ということを見れば見るほど、それだけ一層よくこれらの定型表現は理解されるようになるのである。

8 - 15 節では、パウロは、ローマのキリスト者共同体²と個人的にも出会いたいという自らの願いを説明している。彼は——その手紙のほとんどの場合同様——、教会の現実存在のことで神に感謝する、との言葉をもって始める（8 節）。その諸教会に対して決まって使徒の唇にのぼる最初の言葉としてのこの感謝、——旧約聖書における祭司や預言者の職務とは異なって、この感謝以上に使徒職の特性を強力に表現するものは、あるいはないかもしれぬ。イエス・キリストを通して、またイエス・キリストにおいて、神へと身を向けるとき、彼は、すでに一つのキリスト者共同体の現実存在そのものにおいて、神の慈しみの奇跡をほめ讃えることがゆるされておりほめ讃えずにはおられないのである。というのも、彼がここで特に挙げており、また、全世界に知られていると彼の言う、ローマのキリスト者たちの信仰、——その信仰とは、確かに、例えばかれらの真剣で深く生き生きとした信仰、というのではなく、端的にかれらの信仰そのもの、ということだからだ。すなわち、《イエス・キリストは、ローマにおいてもまた——そしてそれは全世界にとって意義深いことだ——、ご自身の「召し出されし者たち」、ご自身の「聖なる者たち」を持っておられる》という事実〔こそが重要なのだ〕。この意味においてかれらのことを想いつつパウロが神へと身を向けるとき、《彼がかれらのために祈る》ということ、それゆえ、《かれらのことが彼の心に——言葉のこのような最も厳密な意味で——かかっている》ということは自明なのであり、また、パウロは神をそのことのための証人として呼ぶことができるのである（9 節）。そして、まさにこうした彼の執り成しの祈りは、そのまま（10 節）、やはり自明なことながら、彼自身が一度かれらのところへ行くことが神の意志に従って可能となりますように、との願いとなるのである。

[1]³

彼はかれらに会いたいと願っている（11 節）。そしてそれは、彼自身に与えられている霊の賜物を更に差し出すことによってかれらを力づけるため、である。ここで語られている霊の賜物とは、端的に、5 節によれば彼にその宣教が委託されているところの福音、である。他の者たちは他の賜物を持っている。パウロは、第 I コリント一二章では霊の賜物の相違について語ったし、この手紙においても一二 6 以下でそのことについて語るであろう。この賜物が、〔すなわち〕福音の宣教が、彼に与えられている使徒職という賜物である。彼はこの賜物をそのすべての手紙において主張した。そして、教会の基礎づけ（それゆえ狭義における伝道）にとつてのこの賜物の意味のみならず、教会を力づけることにとつても、それゆえ教会を建て上げ保持することにとつても有するこの賜物の意味を主張したのだった。

[2]

だがしかし、使徒職は、その担い手を自己満足させることはしないのであり、それゆえ、パウロは続きにおいて（11 - 12 節） こう付け加える。《教会を力づける》ということは、彼にとっては、《かれらと自分の信仰との互いの交換によって、自分が、かれらと一緒に慰められ勧められる

² 原語は **Christengemeinde**。これはもちろんキリスト教会のことだが、教会と国家との関係について特にこの語を用いてドイツ各地でなされた一九四六年の有名な講演「キリスト者共同体と市民共同体」(**Christengemeinde und Bürgergemeinde**) (近刊『バルト・セレクション 6』所収)があるため——時期的には本註解が数年先行するが——、以下でもこの語については「キリスト者共同体」と訳すことにする。

³ [] および数字は——改行も含めて——訳者による。

ことを希望する》ということと同じ意味なのだ、と。《イエス・キリストが、彼と教会の上に立っておられる》ということ、それゆえ、《彼自身——パウロ——は、教会の上に専制君主として立っているのではなく、自身、教会の中に生きているのであり、与える者であるのと同じく受ける者でもある》ということ、——これがパウロには真剣なことなのだ。かくして、彼がローマの教会のために祈るとき、また、かれらと個人的に会えるよう祈るとき、確かに彼は自分自身のためにも祈っているのである。